9月22日　　ヨハネによる福音書10章31～42節
「自分を神とする」

私たちの身の回りに、自分を「神」としてしまっている人はいないでしょうか。例えば身分が高くなることによって、役職が付いたり部下が付くことによって尊大になる人のことを、容易に想像できると思います。お金持ちであったり、大きな家に住んでいたり、それ自体がその人の価値を高めるわけではないにもかかわらず、誰かに対して偉そうな、尊大な態度をとってしまう人がいます。そのような人は、まさに自分が神か何かになったかのような、全能感によって酔いしれてしまっているのでしょう。

今日の個所では、自分が神の子であることを堂々と証しするイエス様と、自分こそが正しいと頑なになって、神様の御心ではなく自分の正しさを優先してしまい自分を「神」としてしまったユダヤ人たちが対比的に記されていました。私たちも、日常生活の中で思い当たる部分があるかもしれません。私たちはキリスト者として、素朴な信仰に生きることが許されているのと同時に、宣教のために具体的な行動を起こすことが求められてもいます。ただそれは、決して「あなたが間違っていて、自分が正しい」という形で行われるものではありません。そもそもが、多数決を取れば私たちが負けてしまうような、まだまだイエス様のことを知らない人が多いこの日本の、岩手の江刺の地で、「自分が正しい」と自分を神にしてしまえば、その言葉にはだれもついてこないのではないでしょうか。これが、宣教のとても難しいところです。ただ正しいだけではいけない、本当に正しかったとしても、その正しさの上に胡坐を書いてはいけない。それがこの地で生きる私たちに貸せられている宣教の難しさなのです。

それではイエス様は何と言っているのでしょうか。今日の箇所ではユダヤ人たちに対して「もし、私が父の業を行っていないのであれば、私を信じなくてもよい。しかし、行っているのであれば、私を信じなくても、その業を信じなさい」と、そのように言っています。「父の業」「神様の業」を行っているということ、それはなにも奇跡のようなことを起こすことだけではなく、神様が私たち一人一人を愛して目をかけてくれているように、私たちもまた、柔和で穏やかでい続け、誰かを愛し慈しむ、「ただの人」ではなしえないほどに「愛の人」となることをも意味しています。それによって、「この人が信じているイエス・キリストは本物なんだ」ということを伝えることができるのです。

そしてそれに加えて、教会で「楽しいこと」をたくさんしたいと思います。私たちは10月20日にバーベキューをします。12月にはアドベントコンサートがあります。そのように、私たちはこの江刺教会を安心して、楽しいことをすることができる場所にすることが出来ます。イエス様がそうしていたように、共に喜び共に食卓を囲む、その「交わりの場所」「誰が来てもいい場所」となることができれば、この教会により多くの人が集うのではないでしょうか。私たちは、イエス様からそれを行うための力を与えられているのです。

誰に対しても、神様が愛する一人一人であると理解しながら、尊敬の念をもって接し、愛と慈しみによっていつも気に掛ける、その愛の業をこれからも続けていきましょう。

今日の説教箇所：ヨハネによる福音書10章31～42節

- 31:ユダヤ人たちは、イエスを石で打ち殺そうとして、また石を取り上げた。イエスは言われた。「私は、父から出た多くの善い業をあなたがたに示してきた。そのどの業のために、石で打ち殺そうとするのか。」ユダヤ人たちは答えた。「善い業のことで、石で打ち殺すのではない。神を冒瀆したからだ。あなたは、人間なのに、自分を神としているからだ。」イエスは言われた。「あなたがたの律法に、『私は言った。あなたがたは神々である』と書いてあるではないか。神の言葉を託された人たちが、『神々』と言われ、そして、聖書が廃れることがないならば、父が聖なる者とし、世にお遣わしになった私が、『私は神の子である』と言ったからとて、どうして『神を冒瀆している』と言うのか。もし、私が父の業を行っていないのであれば、私を信じなくてもよい。しかし、行っているのであれば、私を信じなくても、その業を信じなさい。そうすれば、父が私の内におられ、私が父の内にいることを、あなたがたは知り、また悟るだろう。」そこで、ユダヤ人たちはまたイエスを捕らえようとしたが、イエスは彼らの手を逃れて、去って行かれた。イエスは、再びヨルダンの向こう岸、ヨハネが初めに洗礼(バプテスマ)を授けていた所に行って、そこに滞在された。多くの人がイエスのもとに来て言った。「ヨハネは何のしるしも行わなかったが、彼がこの方について話したことは、すべて本当だった。」そこでは、多くの人がイエスを信じた。